

## 中国大連との出会い

—1985年の訪問—

東京医科大学茨城医療センター 消化器外科 田淵 崇文



2012年9月に日本政府の尖閣諸島国有化に反発し中国各地で想像を絶する大規模デモ、日系企業の破壊が広がり、その後も中国軍部の圧力は絶えない。日中関係は1972年9月29日田中角栄首相と周恩来首相が日中共同声明に調印し国交を正常化して以来最悪の状態に陥っている。中国国民のどれだけが今の状態を支持しているのだろうか。もっとも被害を被っているのは理性的民衆、民間企業であろう。中国には理性的民衆が少ないはずはない。中日関係を理性的な関係に早く戻すことを民間レベルで努力しなければならない。反日運動の最中、2012年9月23日「反日、聞こえぬ街大連」「ひらがな看板も隠さず営業」の見出しで、中国各地に広がる日本製品排斥の動きを感じ取れない大連市の状況が新聞報道された。私は安堵した。なぜなら、過去から今に至り、大連では非常に貴重な体験をし、信頼できる友も数多くいる。思い入れのある街である。

私と中国との出会いは1983年5月に遼寧省にある中国医科大学(旧満州大学)、大連医学院(現大連医科大学) 附属第一病院の訪問に始まる。同病院の前身は、1930年に設立された大連赤十字医院である。国交正常化後10年余が経過したが、個人的な入国は難しい時であった。CTを購入に伴う技術指導、および医師の講演依頼の要請が大連医学院附属病院から島津製作所にあり、その医師の講演依頼が私の上司のもとに届き、同行したのが始まりであった。北京駅から瀋陽まで12時間、瀋陽から大連まで6時間の計18時間のSL列車の旅であった。当時中国では、文化大革命の10年間に後れを取った医学を早く取り戻すべく、海外留学、外国人招聘で医学教育、医療技術の向上に努めていると聞かされた。その折、大連医学院附属第一病院は私の勤務する東京医科大学霞ヶ浦病院との友好関係の構築を希

望され、両病院長の同意が得られ1985年から友好病院として毎年の大連医学院付属第一病院から医師、看護師等の留学とわが病院からの技術指導、講演での訪問による交流が始まった。1985年5月、第一回目の交流が始まり、私ほか4名が訪問した。私は、食道静脈瘤の硬化療法、PTCDの技術指導を担当し、日本から内視鏡、治療材料を持参した。中国語はまったく解らず、通訳を通じての治療なので、硬化剤注入のタイミングが合わず、治療に難渋した患者さんもいた。危険を顧みずよくやったものだと思ふ。何しろ肝硬変もかなり進んでおり、何回も吐血し、Hb値が3g~5gの患者を依頼された時は輸血の準備をお願いしたが、中国では輸血は患者自身が購入するし高価なので貧しい患者は輸血をできないと言われ、その患者の治療は辞退した。しかし翌日患者が泣いて治療を願うとのことで再度私に依頼が来て勇気をもって治療を完遂させ幸い出血も無く、翌日の回診では笑顔で感謝された。大連を離れる折も容体を担当医に聞いたが、安定している返事を聞き一安心した。当時の病院内で、印象深かったことは、手術室を見学した折、学校給食でよく使う大きな「やかん」と「金だらい」が置いてあった。何をするのか尋ねると、手術時の手洗いに沸騰した湯を冷まし、薬用せっけんで手洗いにすることには驚いた。胃潰瘍と乳癌の手術を見学したが手際良い手技で淡々と進んでいた。月に約100例の胃切除を静脈麻酔と硬膜外麻酔の併用で行っていると聞いて、手技の手際の良さは必然となると感じた。病院は近代的建物とはほど遠く院内照明は暗く、外来は人民服姿の患者でごった返して、意味は解らないが、かん高い大きな声があちらこちらで聞こえ、その視線は私たちに注がれている様にさえ感じた。病院内の案内は病院長が通訳を通して詳しく説明されたが、



設備環境は非常に悪く、医療機器、検査機器は古く、当時の日本（昭和60年）のレベルにはほど遠いものであった。流暢な日本語で通訳された先生は、1943年から2年間東京女子医専で学び、当時循環器内科教授で活躍され、86歳を過ぎた今でも診察されている柯若儀（Ke Ruoyi）先生（1926年生）で、彼女もまた1966年から始まった文化大革命の10年間では医師たちは遥か地方に追い出され医学教育もできず、致命的に医学教育の遅れたことが、今の大連医学院の現状を生んだことのかやさを私たちに熱く語ってくれた。さらに、早く日本に追いつくためいろいろな手段で留学をさせて教育しているとも話され、日本の医療の素晴らしさを合わせて話され感動を受けた。もう一人の通訳は29歳の青年外科医、胡祥（Hu Xiang）先生（1956年生）、彼は中国医科大学（旧満州大学）時代、選択外国語を日本語とし、日本語で1年間授業を受け、ある程度日本語を話せる段階であった。柯教授から生きた日本語を勉強するのに絶好のチャンスと言われ、彼は四六時中私の面倒を見てくれた。大連市の中心にあたる中山広場にある大連賓館を宿とし12日間滞在した。大連賓館は日本人が大連を租借地として納めていた時代に建てた満鉄直営のヤマトホテルで、ルネサンス式のロビーは天井が高く、床、柱は大理石で張り巡らされて重厚なホテルで感動した。しかし、気の短い日本人ならば喧嘩になるだろう程、従業員のサービス精神は無かった。ホテルのランドリーに下着、ワイシャツを出すと灰色になって戻ってきたのとバスタブに泥が沈殿したことには驚いた。帰国後すべて捨てた。周辺には満鉄病院、旧横浜正金銀行など日本が満州を支配していた時代の名残を感じた。ホテルの窓から見える景色は、ゴシック調の歴史的建造物、中山広場で太極拳を楽しむ人々、周辺に立ち並ぶ古い住宅用アパートで、高層ビルはほとんど見当たらず、

夜間はきらびやかなネオンは無く、街灯の薄暗い明かりが道路を照らす程度で、暗いライトを点灯した車が時折行きかう程度だった。あるとき、朝早く広場を散歩していると、一人の老人が「あなたは日本人ですか」と話しかけてきたときは一瞬身構えたが、「私は日本語をずいぶん忘れてましたが、日本人の先生から教育を受けたことに感謝している」と話されたときは驚きと安堵した気持ちで、今回の大連訪問の理由を話した。老人から「友好を築いて下さい」と言われ別れた。平日は8時に外科のスタッフ室に行き、お茶を飲みつつ当日の予定を知らされ、それに従って行動した。ある朝、私のロッカー内に中国のたばこ1ケースが置いてあり、尋ねると、中国では親しい友人にたばこを勧めるのが礼儀だと聞いたが、誠かどうか解らない。休日には外科の先生方と病院車、と言っても古びたマイクロバス、で大連市内を観光したが、市内を行きかう車は、会社のマイクロバス、路面バス、ロシア製の乗用車、個人で車の所持は無く、通勤はトロリーバス、路面電車、会社の送迎車、自転車と聞いた。人々は人民服が大半で、女性もカラフルな服装をする女性ほとんど見かけず、観光地でカラフルな服装をしているのは外国人ですぐ分かる。当時の医師の月給は平均100元（1元は約100円の時代）、生活は質素で、食料は配給されるものもあり生活には困らないと言っていた。しかし、市内の百貨店で見かけた正札では、白黒の小型テレビ450元、小型カラーテレビ1500元、サンヨーラジカセ610元、扇風機150元、小型洗濯機170～190元と贅沢品は高価であった。衣類はワイシャツ7～8元、婦人用スカート24元、オーバーコート100～150元の正札が付いていた。ちなみに現在45歳の外科教授の給料は約8000元と聞いている。日露戦争の壮絶な戦いの場、旅順をこの目で見たかったのだが日本人には解放されず断

# R E M I N I S C E N C E S

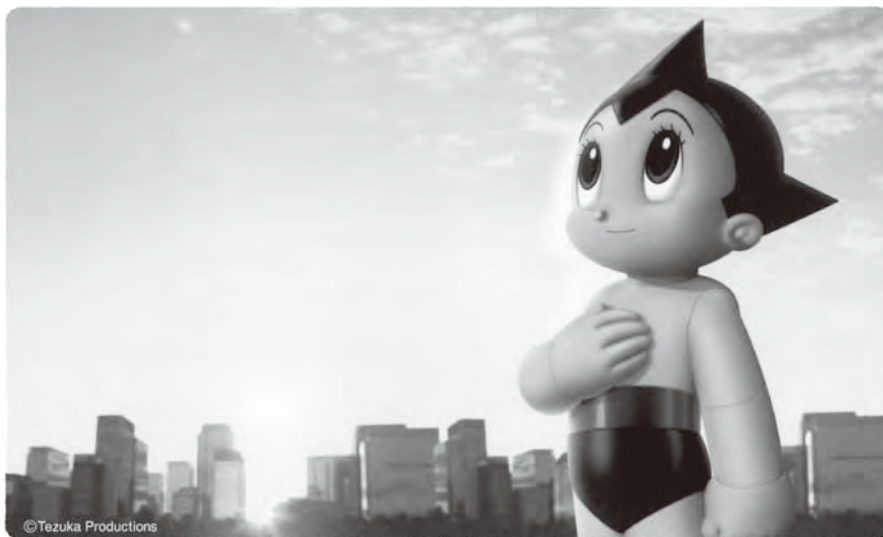


写真左から

- ①宿泊の大連賓館前。日本人建設の旧ヤマトホテル
- ②1983年訪問時の車窓からのSLと鞍山駅
- ③1985年大連医学院付属第一医院内視鏡室、内視鏡所見記載中の著者
- ④大連市内の中心中山広場の朝
- ⑤大連港

念した。滞在中、日本人をほとんど見かけること無く、12日間の滞在中、病院のご厚意で北京、西安の旅行を計画していただき、6月8日大連駅を午後4時列車の旅に就いた。その折、胡祥先生が業務命令で私たちの旅の案内人となった。彼は私たちと10日間寝食を共にし、辞書とノートを一時も離さず、一生懸命通訳を兼ねて日本語を勉強していた姿には頭が下がる思いをした。日中国交正常化11年は経過したとはいえ、日本人を敵対する視線も感じる中で、彼は私たちの安全に気を配り、おかげで順風満帆な思い出深い旅を終えた。この短い中国滞在であった

が多くの出会いと青年外科医への恩は決して忘れまいと誓い、6月17日無事帰国した。この縁をきっかけに大連の先生たち、特に胡祥先生とは兄弟の様な付き合いをし、その後、十数回大連を訪問し親交を深めるとともに近代化する大連を見てきた。胡祥先生は努力の甲斐が実り、日本への国費留学が叶い、大阪医科大学に留学し岡島邦雄教授の厳しい指導を受け医学博士を取得し、現在は大連医科大学付属第一病院で主任教授として活躍している。親日派の多い大連医科大学とは今後も友好関係を続け、友好の輪を広げていかなければならないと感じている。



処方せん医薬品：注意—医師等の処方せんにより使用すること  
 プロトンポンプ阻害剤 [薬価基準収載]  
**パリエット**® 錠10mg  
 錠20mg  
 <ラベプラゾールナトリウム製剤> [www.pariet.jp](http://www.pariet.jp)

製造販売元 **Eisai** エーザイ株式会社

東京都文京区小石川4-6-10

製品情報お問い合わせ先：エーザイ株式会社 お客様ホットライン  
 フリーダイヤル 0120-419-497 9~18時(土、日、祝日9~17時)

● 効能・効果、用法・用量及び禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

PRT1206M02